

## 仏教と医療とのかかわり

古代インドから現代日本までの移りかわり

杉田暉道

演者は仏教が、古代インドにおいて勃興し、発展し、さらに中央アジアを経て中国に到来し終着の日本に定着して現在にいたるまで医療がいかなる形でかわり、重要な役割を演じてきたかを系統的に明らかにし、その成果をふまえて、今日のわれわれが抱いている病気や健康に対する不安感を幾分かでもとり除き、現代のわれわれの生き方についても役立てたいと考えて以下の検討を行った。

釈迦が仏教を開くにいたった社会的背景として、一、一般住民はバラモン文化が確立した為に強いられるようになったカースト制、輪廻、業などから、是非逃れたいという強い願望を持っていた。二、ガンジス河流域は商工業が大いに発達してバラモン文化による束縛を断ちきり、種々な思想を持った思想家が輩出して自由な論争が行われた。三、弱肉強食の戦国時代であったなどがあげられ、釈迦が出家するにいたった動機については一、釈迦の内向的性格、二、精神的安らぎを得ようとした、が定説となっている。また仏教が急速に広まった理由については一、新興商工業者の物質的な援助、二、僧団が平等、自由、慈悲を根本理念として運営されていた、三、釈迦はその人の能力に応じた対機説法を行ったことなどが挙げられている。

これに対しマクニールは「ガンジス河流域は地形上氣候風土が、中国の農民疾病のり患の危険があまりに大きかったためにそこに入りこむのに、ことばに表現できない苦勞を重ねた揚子江流域よりもさらに一段と高温多湿の度合が甚だしいので多種多様の疾病が蔓延する条件のもとに古代文明が作られた」と述べ、さらに「仏教は病氣による突然の死を人間の生の重要な事実のひとつとして扱わねばならなかった。すなわち仏教は死を苦しみからの開放であると説き、死こそ祝福された者（煩惱にうちかつた者）だけが集まり、地上で受けた苦しみが充分に償われる至福に満ちた死後の世界の喜ばしい入口であると納得いくように住民に説明することができた。」と結んでいる。

このマクニールの説は、仏教が興り、急速に発展した理由および釈迦の出家の理由を考察する上に是非とも考慮すべき重要な条件であると強調したい。このように考えたと仏典の中に驚くほど詳細に医療記事が記載されている理由が十分に納得できるのである。

仏典にみる薬物については、時薬、夜分薬、七日薬、盡寿薬に分けられる。時薬とはすべての根類、すべての穀類およびすべての肉類をさし午前中にしか食することができない。これはいいかえると自然に存在するすべての生物は薬物になるということであつて、アーユルヴェーダの自然と人間は一体であるという原理に基づいているのである。夜分薬とは午後および夜飲むことができる十四種類の飲料水をさす。七日薬とは出家僧が病氣にかかった時七日間貯えることができるもので、酥、蜜、石蜜、油、脂、生蘇などの栄養剤をいう。盡寿薬とは病氣にかかった時は一生涯貯えておくことができるもので、呵梨勒、華芡、胡椒、薑、塩などの強壯剤、健胃剤などをさす。

さて大乘仏教の初期すなわち紀元前後頃に成立したと推定される『法華経』の薬王菩薩本事品第二十三に、薬王菩薩が自分の腕を七万二千年間燃やし続けて仏に供養したので無数の人々がその功德によつて悟ることができたという説話があるが、これが多くの民衆に強い共感を与え、医療を行う者は自己を犠牲にした慈悲深い精神をもつて事に当たらねばならないと強調されるようになった。もともと『法華経』の薬王菩薩の説話は一般民衆が悟りを得る（心を癒す）ため

の方便として語られたのであるが、現実的には薬王菩薩は心を癒すよりも肉体を癒すことを祈願する菩薩としてのイメージが強くなり、専ら病気の治癒を祈願する菩薩として崇められるようになった。これが後に薬師如来像を製作するきっかけとなったのである。

中国に伝わった仏像は、五胡十六国の時代に典型的な特徴がみられる。それは、一、方術的であった。二、五胡君主が僧侶の持つ方術を国政運用に利用したことである。

中国に伝わった仏教医学は中央アジアなどのように文字通りに受容されなかった。古い文化を持つ中国人は、これを彼等の考え方に合うように修飾した。かくして中国の仏教医学はつぎの三つの特色を持っていた。一、中国の四元素説（地、水、火、風）に基礎をおく病因論が、仏教医学の四大病因（ヴァータ、ピッタ、カパの三体液のバランスがくずれると病気にかかるという説）に重ね合わされた。二、治療のタイプが(1)信仰および呪術によるもの、(2)投薬、食餌法および外科などの本来の治療によるものの二つに分けられる。三、仏、菩薩を心身の治療師として崇拜する習慣が確立した(その典型的なものが薬師如来である)。中国の仏教医学は今述べたような状況であったが、実際には中国は道教と結びついた呪術医学の伝統が深く根を下していたので信仰および呪術治療が好んで用いられた。とくに密教が入ってからはこの治療が一層盛んになった。

いよいよ仏教東漸の終着駅であるわが国について述べる段になった。仏教が最初に日本に伝えられたのは、百済の聖明王が紀元五三八年に釈迦仏の金銅像一軀、幡蓋若干、経論若干巻と怒唎斯致契ヌリシチケと大物使者を遣わしてわが国に仏教を受容することをすすめたのがはじめである。聖明王がこのような方法でわが国に仏教を受けいれるよう奨めたのはわけがあった。梅原によれば「それは当時百済は新羅が強力になって攻撃をしかけてくる危険性があったので、日本からの出兵を催促する一念を、祈る思いで使者を遣わしたに違いない」と述べている。この百済の仏教受容のすすめに対し蘇我・物部両氏の仲違いが生じ、その後約五〇年を経て物部氏が敗れて仏教受容派の蘇我氏が勝ちわが国が仏教を受けい

れる事になった。このように仏教受容という大問題をさほどのことと考えずに平然として受け入れた日本人の宗教意識について梶村は「尋常ならずすぐれた徳を神として受けいれる日本人の宗教感覚」によると記している。と同時に氏族の豪族達は自らの権威、権力を誇るために金銅の仏像や経典、そして僧侶を欲した。その為に氏寺を建てたのである。彼らは高邁な仏教思想は理解できなかったが仏教文化や仏教美術を熱望したのである。

日本に伝来した仏教が今日にいたるまでの経過において、どのような形で医療とかかわったかをみると次の四つがあげられる。一、日本は仏教に古代インドの医学を運んだ。二、僧医として経験科学的な医療を行った。三、加持祈禱による医療を行った。四、看護の面で大いに貢献した。これらの医療とのかかわりを評価の点からみると、一、仏教はターミナル・ケアにおけるひとつの典型を示した。二、仏教は仏教観に基づく病因論を持っていた。三、穢れ意識を克服した宗派があった。四、病苦を癒してくれる最後のものは神や仏であると今日の日本人も信じている。五、病気に対する仏罰観が存在した、の五つがあげられる。

さいごに仏教の古代インドから今日までの一貫した思想の流れは、生けとし生けるものはすべて平等であって、このすべてを精神的に救おうということにある。そもそも日本の土着宗教は生けとし生けるものすべて平等であって、人間は死ぬとまた生まれ変わるといえるのが根本思想である。したがって今日の日本の仏教の形体は土着宗教の思想が十分に生かされているといえる。現代の物質文明は人間至上主義を根底において発展したために地球の危機を招くにいたったと考えられる。今日こそ地球上のすべてのものに対する価値観を変えて、これらと共存共栄することを真剣に考える必要があると思われる。

(神奈川県予防医学協会)